る予算状況には深刻なものがある。限られた予算を有効に使うことはもちろんだが、せっかく来てくれたゲストへのホスピタリティがおろそかになってはならない。かつてのように予算が潤沢とはいえなくなったからこそ、わざわざ海外から招聘に応じてくれた研究者への礼を失することの無いようにしたいものである。招聘の段階で、その条件をきちんと説明しつつ、可能な限り先方の要望に弾力的に応じていく体制が不可欠だろう。日文研は共同利用機関であり、何よりも海外の日本研究の促進をミッションとしているのだから。

（国際日本文化研究センター教授）

汪暉氏と歩く被災地・被差別部落——新しい主体性の形成に向けて

磯前順一

汪暉氏（清華大学人文学・社会科学高等学院所長）が現代中国を代表するポストコロニアル世代の人文学者であることは広く認知されているところである。汪氏が二〇一九年一月一六日から三一日まで京都の国際日本文化研究センターに滞在し、レクチャーやセミナーを行うとともに、筆者とともに所外活動を行った。以下は、その覚書である。

到着の翌日にあたる一月一七日に、私たちは震災の追悼セレモニーの開かれている神戸市を訪問した。最初に訪れたのが多くの市民の集まる東遊園地。震災の起きた時間で止まった時計を抱えた海の女神像、東北地方から送られた雪で出来た地蔵菩薩像、「一・一七」の文字をかたどった竹の灯篭などを見学した。竹灯篭では、一つの灯篭から別の灯篭へと火を移していく儀式に、人と人を繋ぐ共同性が構築される端緒を見た思いであったと汪氏は言った。最後に向かった記憶のモニュメント施設では、一面に湛えられた水面に花びらを共に浮かべ、祈り、犠牲になった方たちの名前の記された壁面に頭を垂れた。

東アジアにおいて「宗教」という言葉が西洋のキリスト教の意味合いを多分に含みこむものであることは、今日の宗教研究では国内外を問わず周知の事実である。では、「その影響を受けながらも、完全には回収されない余白を含む言葉にどのようなものがあるか」という質問を汪さんから受けた私は、「近代以前から存在する「信仰」という言葉が思い出さ



1月22日開催「所長主宰研究談話会」の後にて
（写真左より、筆者、汪暉氏、小松所長、荒木副所長、安井教授、稲賀教授）

れる」と答えた。しかし、その影響が西洋か非西洋かという議論よりも、そうした要素があいまっていかなる主体を作り上げているのかを論じた方がより有効であろうという点で、私たちの見解は一致した。

次に、被害のもっとも甚大であった長田区に移動した。JRの駅前には広大な青色のビニールシートのうえに、ペットボトルで作った蝋燭台が「ながた」という文字を象っていた。人の集まりは東遊園地にくらべると、夕方のセレモニーだからであろうか、いまだまばらであった。その端には長田の特産である、なめし皮をもちいた和太鼓が並べられ、夕方のセレモニーで音が轟くのをいまかと待っているかのようであった。

そこから皮革製品を作っていた町工場のあった地区に足を運んだ。地震が誘発した火災によって灰燼に帰したこの街は、震災から二〇年以上を経た今も復興のさなかにあった。否、正確に言えば、復興が途中で止まった状態にあった。かつての個人の零細経営を中心とした皮革産業ではなく、それを一極集中した経営に切り替えつつある。そして、乗り遅れた家々は、今も空き地になったままであった。良くも悪くも、震災が資本の一極集中化を推し進めたのである。

東遊園地では垣間見ることのできなかった、復興のもたらした影の部分を目の当たりにした汪氏は、次のような感想を語った。

「国民国家の外部、他国民との間にも搾取や排除の事態が立ち現われることはよく指摘されている。しかし、ここで見られるのは、おなじ国民国家の内部で周辺化されるマイノリティや被災者の問題だ。国民国家は外部に周縁を作るだけでなく、その内部に周縁を作り出す。人間が亡くなった後の追悼や記憶のありかたにも格差があることがよくわかるね。」

国民国家は、均質な国民の産出を欲しながらも、その内部のいたるところに余白を含みこんでいる。余白があるからこそ、それを抵抗の拠点とした社会構造の改革もまた可能になるわけだが、そうした余白の場所に割り当てられた人間は容易に社会の大勢を占めマジョリティからの差別の対象になりやすいことも事実であろう。翌日に催された日文研の公開レクチャーでは、汪氏は「「世紀」という思考の始まり――初期二〇世紀中国における帝国主義、ナショナリズム、コスモポリタニズム」という講演を行った。

そこで議論されたのは、「世紀」という西洋キリスト教的な時間観念が本格的に導入されたのは、中国においては二〇世紀が初めてであったこと。同時にこの時期になって、東アジアと西洋、アフリカ、南アジアなど横の地理的な同時性の空間や思考法が成立したこと。当初東アジアの知識人たちは、西洋近代を普遍と考え、自らの歴史的伝統を「特殊（the particular）」と考えたわけであるが、それは西洋列強による植民地化の危機のもと、西洋のオリエンタリズム的な眼差し、すなわち西洋のみを「普遍（the universal）」と考える見方を内面化した産物でもあった。

こうした西洋中心主義的な近代の捉えかたを汪氏は批判し、近代とは西洋だけが独占する単数の“modernity”ではなく、複数の“modernities”であること。それゆえ、「普遍」と「特殊」という対概念で捉えるのではなく、「普遍」と「単独（the singular）」という組み合わせのもとに、その二重構造を考えるべきだと述べた。ここでいう「単独」とはそれぞれの地域に固有の歴史があるとする見解であり、〈西洋＝普遍／東洋＝特殊〉といった二項対立を脱臼させる働きを促す。そこでは、単独と組み合った「普遍」とは西洋に専有されたものではなく、固有の歴史をもつ各地域にみられる、他者へ開かれようとする働きを指すものとなる。

こうした理解は、タラル・アサドが唱える「複数の近代」あるいはガヤトリ・スピヴァクの唱える「複数の、他者なるアジア（other Asias）」といった概念に呼応する点で、西洋近代のヘゲモニーを脱構築するポストコロニアル研究者ならではの理解といえよう。ただし、汪氏の理解は単なる複数性や「多重性（doubling）」を指摘するにとどまらず、単独性こそが普遍性に開かれた入り口をなすことを指摘した点で、ともすれば相対主義に陥りがちなポストコロニアル思想を、「非共約的なものの共約性（commensurablity of the incommensurable）」という意味での普遍的なコミュニケーションの場に推し進めたものと言えよう。

それゆえに、汪氏は通俗的なポストモダニストが声高に叫ぶ主体が要らないといった立場は取らない。むしろ、どのように政治的な次元において主体を構築するかという視点から、現在の中国社会では語ることがタブー視されがちな中国の文化大革命など、東アジアの歴史を読み直していく。

主体とはしばしば誤解されているように啓蒙主義的な西洋的個人を指すものとはかぎらない。集団や社会を単位としても、人びとは何がしかの主体を形成しようと試みており、その政治的次元を「主権者（sovereign）」と呼ぶのである。グラムシの言うところの、ヘゲモニーによって構成された「歴史的ブロック（historical block）」もまた政治的主体の典型的なものである。主権者とは言うまでもなく、公共空間における社会的権利を主張することを認められたものなのだ。

こうした主体あるいは主権を形成し得ないとき、人間は排除されたり、あるいは社会的権威の一部に容易に取り込まれていく。こうした主体の構築は、すでにアルチュセールが指摘するように重層的になされており、例えば性的マイノリティがマジョリティに抑圧される社会的存在である一方で、ときに高学歴を修めることで恵まれた社会的地位に就いていることも珍しくはない。近代が複数性のもとに存在するように、主体もまたその内部に分裂や亀裂を抱えた非同質性を本質とするものなのだ。ただ、そうした自己の主体を走る亀裂に居心地の悪さを感じる人びとは、自分を一方的に、それがマイノリティであれマジョリティであれ、何かと同一化を図ることで自己の安心を得ようとするのである。

そんな議論を私と汪氏が本格的に行ったのは、二六日に阿倍野の四天王寺から、葦原橋にある被差別部落を訪問した時のことである。「毎年日本にきているけれど、これまで被差別部落を案内してくることはおろか、そうした地域が存在す

ることを教えてくれた人もいなかった。実際には存在しているけれど、見えない存在とされた地域が日本にも存在していることが実感できた」。そういって汪氏は私に何度もお礼の言葉を述べてくれた。我々の会話は四天王寺のお堂の下に住んでいたとされるハンセン氏病者、さらに周辺の被差別部落の人たちが受けた苦しみに話は及んだ。そこで「主体ない人びとの共同体」を語る知識人たちの姿勢について話が及んだ。

汪氏の「政治化（politicizing）」とは「政治的状況への参入」を意味するものであり、カール・シュミットの議会制民主主義批判を意識しつつも、その「敵／友」の二分法を脱臼させた上で提起されていた議論である。この点は、二九日に行われた有志における汪氏読書会で確認された。しかし、シュミットに与しないからと言って、汪氏がヒューマニズムをもろ手を挙げて支持することはない。

汪氏はそうした立場を取らず、ニーチェやマルクスやフロイト以降の「人間の死」と呼ばれるような、主体の存在形態を規定する社会構造そのものを問題とする。ただし、主体は構造に根ざして族生するものであり、主体が構造に自己反省的に介入することも可能である。そこにおいて、「政治的主体」を形成する契機が生じると汪氏は考える。もし、そうした主体の存在そのものを拒否するならば、人間という個物は社会構造に飲み込まれたままになるだろう。主体に対する「批判」は大切なことであるが、それが今日多くの識者が顕いているような、主体そのものの「否定」とは混同されてはならない。

以上のように、汪氏と私は被差別部落を歩きながら語りあった。そこから、「新しい主体化形態（new form of subjectivity）」、歴史的ブロックの存在形態が模索されていくことになるのだ。事実、すでに現実の社会では、表象力の有無を分岐点とする「知識人」と「民衆」という二項対立がすでに脱臼にされている事態が看取されるという。その実践の公共空間が神戸の東遊園地であり、長田駅前であり、各地の被災地の祭祀空間ということになる。この新しい主体化をめぐる汪氏と私の会話については、三〇日に行われた磯前による被災地における主体化をめぐる報告「Without You——あなたのいない世界を生きて」にさいして討論された点であるが、それはまた別の機会に報告することにしたい。

（国際日本文化研究センター教授）